



欧米と日本の距離を感じて

森脇 香織

「英語は目的ではなく手段だ」アメリカで勉強したいと言った私に対する父親からの言葉である。父親は続けてこう言った。「アメリカで勉強したいのならサポートするから、きちんと手に職をつけて帰ってくるように」これは昔海外で生活していたからこそ言える父親の実体験が反映された言葉だと感じている。

この言葉を胸に私はアメリカに旅立った。アメリカではサイエンス、特に生物を学ぶと決めていた。日本より設備が整っていること、そして学ぶということに対して厳しいと思っていたからだ。

一生の宝になるカリフォルニアでの大学生活が始まった。卒業するまでの間、午前2時に寝て7時に起床する生活であったが、苦痛はまったくなく勉強が楽しくてしょうがなかった。生物系のクラスでの実験は内容や設備が充実していたので、快適に実験を行うことができた。また生物系のクラスに関しては自分でテーマを決め、仮説を立て実験で証明する。そしてその結果をクラスメートに対して発表する、という日本では経験したことのないことばかりであった。今の仕事の基礎となっているであろう、プレゼンテーションでの自分の見せ方や話し方はアメリカで学んだ。

もちろん宝は大学での勉強だけで得たのではなく、ルームメイトやクラスメート、友達、あるいは教授たちとの出会いが私の視野を広げてくれた。またアメリカ生活の中で自分が努力をすれば周りの人が助けてくれたり、相応の評価を得られたりすることも実感した。

無事に大学を卒業し、就職のために日本に帰国した。父親の言葉通りに、私は語学以外に手に職をつけたのだろうか？と不安に思いながら研究の職に就いた。がん研究の一環でマウスからDNAなどを抽出しシーケンシングを行うという仕事であった。研究の仕事は楽しかったが、マウスを殺すという行為と得られたデータを有効活用できないジレンマに陥った。Excelやフリーのソフトではデータ解析は限界があることを実感した。

研究を行なっていて感じたジレンマを解決すべく、いわゆるドライと言われているインフォマティクスの会社に転職をした。この会社では実験で得られたデータを処理する専用アプリケーションの開発と販売を行っていた。世の中にはさまざまな有効なアプリケーションが開発されていて驚かされたと同時に、自分が研究をやっている時にこのようなアプリケーションがあればもっと効率よく結果を得られたかもしれない、と思うようになった。それから今日現在までずっとインフォマティクス

の業界で働いている。

現在働いている会社では開発と販売を行なっているアプリケーションがいくつかある。私が担当しているものは、スクリーニングで得られた結果を処理するものとNGS (Next Generation Sequencing: 一度に大量のシーケンスを行うことが可能になることから、網羅的な遺伝子解析が行なえる) などで得られたデータをデータベース化するものである。前者のアプリケーションを使用しているユーザーはいるが、後者は日本ではまだまだこれからのアプリケーションである。今後はどのようにしたらこのアプリケーションが日本で受け入れられて、研究者をサポートできるか試行錯誤をしていかなければならない。そのためにはユーザーと話し要望や希望を集める必要があると感じている。それと同時に文献を読み、学会に参加し、最新の研究の情報を得るようにしている。

本社とのコミュニケーションはすべて英語で行なっている。単純にTOEIC〇〇点などの英語力があれば良いというわけではなく、伝えることが重要である。まさしく「英語は手段」であり、それを使ってどのように伝えるか、得た情報をどのように本社と共有するかがポイントとなる。また待っているだけでは何も情報がやってくるわけではなく、自分で疑問に思い積極的に情報を取りにいかないと遅れをとる。

アメリカから帰国し働き出してから、逆カルチャーショックを体験し考え方の違いにとっても苦しんだ。本社の人間とはコミュニケーションはスムーズに行なえていたので、情報を得ていたが、日本オフィスの人たちとは壁があったと感じている。今思い返せば若気の至りの部分があったのだと思うが、日本とアメリカのさまざまな違いに大きく戸惑い挫折を味わった。今は本社とどのようにコミュニケーションをとればよいのか、得た情報をどのように共有していけばよいのか、何となく判断ができるようになってきている気がする。

これからはアメリカでの生活という貴重な経験と、日本に帰国してからの経験を生かし、もっと最前の研究に近いところで研究者と関わっていきたいと思う。日本は欧米に比べ研究という分野では2~3年遅れているという印象を受けることが多い。その遅れは技術であったり、実験データに関する考え方であったりさまざまである。時にそれらの遅れが研究の妨げになっている場合がある。それらを縮めて欧米と同等な研究をサポートできる環境を構築し、研究のスピードアップに携わることができればと切に願う。

